



Title	自尊心が学業達成に影響を及ぼす過程：自己価値の随伴性に着目した検討
Author(s)	大谷, 和大
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/33985
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

自尊心が学業達成に影響を及ぼす過程
— 自己価値の随伴性に着目した検討 —

学位申請者 大谷 和大

本論文では、自尊心が学業達成にどのように結びつくのか、そのプロセスや調整する要因について明らかにするため2章から4章までの各章において一連の研究を行ってきた。自尊心は教育場面において重要視されるものの、学業達成との関連については必ずしも一致した結果は示されてこなかった。その理由として、自尊心の源なる領域については様々なものが仮定できることが挙げられる。本論文では、学業領域を自尊心の源としている程度の指標である、自己価値の随伴性に着目した検討を行った。第1章では、自己価値の随伴性が学業達成に及ぼす影響についてのモデルを提示し、以降の各章でモデルの検証を行った。

第2章：青年前期用自己価値の随伴性尺度の開発

第2章では、クロッカーによる自己価値の随伴性に関する理論(Crocker & Wolfe, 2001)を中学生に導入し、新たな尺度を構成し信頼性と妥当性を検討することを目的とした。まず、中学生の自尊心の源に関する自由記述を行ったところ、芸術能力、学業能力、友人関係、運動能力に関する記述が多く見られた。これらの記述をもとに各領域について4～5項目から構成される尺度を作成した。信頼性を検討するために、 α 係数を算出したところ、各尺度.71～.82であった。また、約3か月の間において再テスト信頼性を確認したところ $r = .41 \sim .66$ の有意な値が確認された。

また、本尺度について、性差および学年差を検討したところ、学年による差はほとんど確認されなかった。一方、性差については芸術能力領域および友人関係領域において女子生徒が高い値を示すことが明らかとなった。また、学年と性別の交互作用が学業領域において確認された。女子生徒は学業領域への自己価値の随伴性を2年生になるころに高める一方、男子生徒は2年生で低め、3年生になるころに再び上昇させることが明らかとなった。

妥当性の検討については、既存のパーソナリティ尺度である、小学生用5因子性格検査(FFPC)、青年前期用自己愛尺度、自尊心尺度の3尺度との相関係数を指標とした。結果、5因子性格検査、青年前期用自己愛尺度とは、低～中程度の相関が確認された。また、自尊心尺度とはほぼ無相関であった。これらの相関パターンは先行研究(Crocker et al., 2003)で示されたものと概ね共通するものであり、妥当性が確認されたといえる。

第3章：自己価値の随伴性の効果を調整する要因の検討

第3章では、自己価値の随伴性が学業達成に及ぼす影響を左右する要因を検討するために、個人の要因と環境の要因について3つの研究を行った。

研究2では、これまで自己価値の随伴性との関係で検討されることが多かった成功・失敗の要因についての研究を進展させ、達成度の認知と自己価値の随伴性の交互作用を検討した。達成度の認知は、中学校に入学してからこれまでの成績についてどのように捉えているのかという内容の質問項目群により測定した。その結果、自己価値の随伴性が高い生徒は、達成度の認知が高い時に、特に、動機づけを高めることが見いだされた。

研究3では、ステレオタイプ脅威の文脈において、取り上げられることの多かったデモグラフィック変数として性別の要因を取り上げ、自己価値の随伴性との交互作用を検討した。その結果、数学の動機づけおよび成績共に性別と自己価値の随伴性の交互作用が確認された。すなわち、女子生徒において自己価値の随伴性は、数学の動機づけと成績を高めると考えられる。

研究4では、環境・文脈的要因として、動機づけ研究で研究が蓄積されている学級の目標構造を取り上げ、階層

線型モデルにより自己価値の随伴性との交互作用を検討した。学級の目標構造は課題の熟達を強調する「熟達目標構造」、課題の遂行を強調する「遂行目標構造」に大別される。研究4では、内発的動機づけと自己調整学習を学業達成の指標として用いた。その結果、自己調整学習方略における自己価値の随伴性と熟達目標構造の交互作用が明らかとなった。すなわち、自己価値の随伴性が高い生徒は熟達目標があまり強調されない学級において自己調整学習方略をより用いることが明らかとなった。

第4章：自己価値の随伴性が学業達成に影響を及ぼすプロセス

第4章では、自己価値の随伴性が学業達成に影響を及ぼすプロセスについて検討をした。先行研究の知見から、自己価値の随伴性が学業達成に影響を及ぼすプロセスには、感情的なプロセスと認知的なプロセスが存在することが示唆される。

研究5では、失敗場面における自己価値の随伴性が内発的動機づけに及ぼす感情を媒介とした影響プロセスについて検討した。その結果、自己価値の随伴性は、状態的自尊心を低下させ、状態的自尊心が低下することで無能感といったネガティブな感情が喚起されることで内発的動機づけを低下させていた。一方で、自己価値の随伴性は後悔という感情も喚起させることで、内発的動機づけの低下を抑制する可能性が示唆された。

研究6では、成功・失敗両場面における感情を媒介とした影響プロセスについて、実際の中間テストと期末テストを利用した縦断的な検討を行った。その結果、成功場面において、自己価値の随伴性は、状態的自尊心を高揚させ、ポジティブ感情喚起させることで学業成績に正の影響を及ぼしていた。また、失敗場面において、自己価値の随伴性は状態的自尊心を低下させ、ネガティブ感情を喚起させていたが、ネガティブ感情は学業達成を促進させていた。なお、成功・失敗両群において自己価値の随伴性は期末テスト時の動機づけに正の影響を与えていた。

研究7では、自己価値の随伴性が、学業成績に影響を及ぼす認知的変数を媒介としたプロセスについて検討した。認知的変数として、達成目標と学習方略に焦点を当てた。結果、自己価値の随伴性は遂行目標（接近・回避）と $\beta_s > .60$ という強い関係を有しており、それぞれが異なったプロセスを経て学業成績にポジティブ・ネガティブ両面の影響を及ぼしていた。すなわち、自己価値の随伴性は遂行接近目標を介した場合、動機づけ方略を介することで、学業成績に正の影響を及ぼし、学業成績に正の影響を与えていた。一方、遂行回避目標を介した場合、認知的に困惑することで、学業達成に負の影響を及ぼすことが明らかとなった。

以上の結果、自己価値の随伴性は感情を喚起させることで、学業達成に影響を与えるということ、目標志向性や学習方略という認知的な変数を媒介することで学業達成に影響を与えるということが明らかとなった。本章の課題として、ネガティブ感情が学業達成に影響を及ぼす結果に研究5と研究6の間で矛盾があったことが挙げられる。すなわち、研究5では、無能感が内発的動機づけを低下させていた一方で、研究6ではネガティブ感情が学業成績を向上させていた。今後は、感情の機能について検討を加える必要がある。また、研究7の認知的プロセスについて、因果関係に言及するためには、更に縦断的な調査を加えることも必要であると考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (大谷和夫)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	三 宮 真智子
	副 査	教授	前 迫 孝 憲
	副 査	教授	中 谷 素 之

論文審査の結果の要旨

本論文は、セルフエスティーム（自尊感情）が、どのように学業上のパフォーマンスに結びつくのか、青年期前期の児童・生徒を対象とし、自尊感情の動機づけ機能について一連の研究から検討している。自尊感情の研究は、古くはウィリアム・ジェームスの時代より行われてきたが、これまでの多くの知見が、自尊感情の高い者ほど精神的に健康で、学業成績・仕事上のパフォーマンスが高いとするものの、一方でこれと矛盾する結果も報告されている。本論文は、その矛盾を説明する要因として、自尊感情の源とされる概念「自己価値の随伴性」に着目し、既存の学習動機づけ理論と結び付けながら理論の整理と統合を試みている。本論文は、以下の内容から構成されている。

第1章「問題の所在」では、国内外でかなりの知見が蓄積されている自尊感情研究および動機づけ研究について、自尊感情の動機づけ機能という観点からレビューを行い、これまでの自尊感情研究の矛盾を説明する枠組みとして自己価値の随伴性への着目の必要性を指摘している。すなわち、自尊感情の高さそのものが動機づけ機能を有するのではなく、どのような自己の領域にその源を置いているのかという自尊感情の質的な側面への着目が重要であると述べ、自己価値の随伴性の理論的枠組みから、学業領域における自己価値の随伴性が学業達成に及ぼす影響過程についてのモデルを提示している。このモデルは、学業達成を自尊感情の源とすることは、ポジティブ、ネガティブ両側面があることを指摘している。第2章「青年期前期における自己価値の随伴性尺度の作成」では、本論文全体を通して検討する自己価値の随伴性を測定する尺度の構成を試み、妥当性と信頼性の検討を行っている。その結果、芸術、学業、運動、友人関係といった青年期前期の生徒の自尊感情の源となる領域が見いだされた。第3章では、自己価値の随伴性が状況的な要因（達成度、ネガティブなステレオタイプ）、環境的な要因（学級の目標構造）と交互作用することで、学習動機づけに及ぼす影響を検討している。状況的な要因として、テストでの成功といった体験の多さ（達成度）が自己価値の随伴性と学習動機づけの関係を強めることを報告している。また、数学の学習について検討したところ、自己価値の随伴性は、数学におけるネガティブなステレオタイプを緩衝し、動機づけと成績を高めることを見出している。さらに、環境要因と随伴性との交互作用を、我が国の教育心理学においては先駆的とも言えるべき「階層線形モデル」により検討した結果、低熟達目標構造の学級環境にいる生徒の自己調整学習方略使用を高める機能があることを確認している。これらのことから、自己価値の随伴性は苦手意識の顕著になりやすい科目や、望ましくない学級環境にいる生徒の学習を補償することを指摘している。第4章「自己価値の随伴性が学業達成に影響を及ぼすプロセス（媒介過程）」では、自己価値の随伴性が①状態自尊感情およびポジティブ・ネガティブ感情を介して学業達成に影響を及ぼすプロセス、②達成目標を介して学業達成に影響を及ぼすプロセスを検討している。その結果、自己価値の随伴性が学業達成を促進する機能および抑制する機能の両価的な動機づけ機能をもつことを明らかにしている。最終章では、以上の結果を踏まえ、自己価値の随伴性が学業達成に及ぼす影響過程のモデルについて、自尊感情研究、動機づけ研究の双方に及ぼす影響、および自己価値の随伴性のもつ教育的な価値について論じている。

これらの知見は、自尊感情の研究と学習動機づけ研究とを橋渡しする上で、教育心理学研究に重要な知見を提供したといえる。

以上より、本論文は、博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。